

資料

特性的自己効力感尺度の検討

——生涯発達の利用の可能性を探る——

成田 健一¹ 下仲 順子² 中里 克治² 河合千恵子² 佐藤 眞一² 長田由紀子³

A JAPANESE VERSION OF THE GENERALIZED SELF-EFFICACY SCALE

—— Scale utility from the life-span perspective ——

Ken'ichi NARITA, Yoshiko SHIMONAKA, Katsuharu NAKAZATO,
Chieko KAWAII, Sinichi SATO AND Yukiko OSADA

The purpose of this study was to examine the reliability and validity of a self-efficacy scale (SES : Sherer et al., 1982) using a Japanese community sample. The SES comprised 23 items measuring generalized self-efficacy. The SES and other measures were administered to a total of 1524 males and females whose ages ranged from 13 to 92. Exploratory factor analyses were conducted separately for sex and age groups and the factor structures obtained from these were compared. The results revealed a clear one-factor solution for the sample as a whole. A similar one-factor structure was obtained across sex and age groups. The SES was found to have satisfactory test-retest reliability and internal consistency. The correlations of the scores on the SES with other measures, such as depression, self-esteem, masculinity, and perceived health, provided some supports of construct validity. Some evidences of the construct and factorial validity of the SES in the Japanese community sample were found.

Key words : Self-Efficacy, Test construction, Validity, Reliability, Community sample.

問 題

自己効力感 (Self-Efficacy : セルフ・エフィカシー) とは、社会的学習理論あるいは社会的認知理論 (Bandura, 1977) の中核をなす概念の 1 つであり、個人がある状況において必要な行動を効果的に遂行できる可能性の認知を指す。ある問題や課題に対する自己効力感を自分がどの程度持っているか (perceived self-efficacy) が、個人の行動の変容を予測し、不適応な情動反応や行動を

変化させる、と指摘されている (坂野, 1989 ; 坂野・東條, 1986)。これまで自己効力感については、主として認知行動療法を中心とした臨床心理学分野において興味をもたれてきた (福島, 1993)。その理由として、提唱者の Bandura 自身の臨床的応用に対する関心や、臨床・教育場面で自己効力感の考え方が実際に機能した事があげられる。臨床・教育場面では、ある特定の課題や状況に固有の自己効力感が測定され、その特定の課題や状況における問題を解決するために、自己効力感が役立っている。例えば、恐怖反応 (前田・坂野・東條, 1987)、不安反応 (Kendrick, Craig, Lawson & Davidson, 1982)、喫煙行動 (Chambliss & Murray, 1979) など様々な臨床場面において自己効力感 は行動の変容を予測する

¹ 東京学芸大学 (Tokyo Gakugei University)² 東京都老人総合研究所 (Tokyo Metropolitan Institute of Gerontology)³ 聖徳大学短期大学部 (Seitoku University)

要因であることが、坂野・東條(1993)の詳細なレビューにより紹介されている。ところが一方、基礎的研究の部分が立ち遅れてきたこともまた同時に指摘されており(中澤・大野木・伊藤・坂野・鎌原, 1988)、臨床・教育場面に限らず広く基礎的なデータの収集が課題として残されている。

自己効力感には2つの水準があることが知られている(Bandura, 1977; 坂野・東條, 1993)。1つは既述した臨床・教育場面における研究でよく用いられている課題や場面に特異的に行動に影響を及ぼす自己効力感である。もう1つは、具体的な個々の課題や状況に依存せずに、より長期的に、より一般化した日常場面における行動に影響する自己効力感である。後者の観点に立つと、自己効力感がある種の人格特性的な認知傾向とみなすことが可能となり、それを特性的自己効力感(Generalized Self-Efficacy)と名づける事ができよう⁴。特性的自己効力感には、個人差の存在が想定され得る。自己効力感を高く認知したり、低く認知したりする傾向は個人により異なり、この高低が個人の行動全般に渡って影響する可能性があるだろう。比較的早い段階で特性的自己効力感に注目していたのは、Sherer, Maddux, Mercandante, Prentice-Dunn, Jacobs & Rogers (1982)である。彼らは、特性的自己効力感が過去の成功と失敗の経験から形成され、個人差を持つことを指摘した。同時に特性的自己効力感、特定の状況だけでなく、未経験の新しい状況においても適応的に処理できるという期待に影響を与えることを示唆した。このため、特性的自己効力感の個人差を測定することは個人の行動を予測し制御する上で非常に重要となる。特定の場面や課題に依存しない特性的自己効力感を尺度により測定する試みは他にもいくつかなされてきている(坂野, 1989; 坂野・東條, 1986; 桜井, 1987; Tipton & Worthington, 1984)。しかし竹綱・鎌原・沢崎(1988)は、特性的自己効力感を測定する尺度作成の試みは始められたばかりであると述べ、統計的な検討も不十分な上に、頻繁に使用される尺度も未だ確立されていない事を指摘している。欧米では Shelton (1990) が同様

の指摘を行っている。これらの指摘に加えて、上述の諸研究はある特定の年齢群にのみ注目しており、生涯発達の視点からの研究がなされていない事もまた指摘できる。

特性的自己効力感尺度(Generalized Self-Efficacy 尺度: 以下, SE 尺度)に限らず、尺度をある特定の年齢群にのみ適用し、その年齢群での信頼性・妥当性が確認されたとしても、他の年齢群への尺度の適用可能性は必ずしも保証されない。特に生涯発達の研究を行う場合、信頼性・妥当性が特定の年齢群でしか認められていない尺度ならば、尺度の利用可能性が著しく損なわれる。その尺度を用いた具体的な研究に着手する前に、研究が対象とする年齢群において、当該の尺度が信頼性・妥当性を持つか否かを検討することから研究を始めなければならない。

本研究は、こうした特性的自己効力感を測定する先駆的研究である Sherer et al. (1982) の SE 尺度を、わが国のコミュニティサンプルに適用し、生涯発達の利用の可能性を検討したい。具体的には、性別、年齢群別に SE 尺度の信頼性・妥当性について詳細な検討を行う。すなわち、本研究の目的は SE 尺度がわが国のコミュニティサンプルを対象としても、性や年齢に依存することなく十分に使用可能で有用な尺度であることを示すことである。

方 法

調査の対象および手続 調査の対象者は、首都圏の Y 市在住の13歳から92歳までのコミュニティサンプル、1641名である。対象者の選定には、Y 市から無作為に地点を抽出した上で年齢および性別により層化してサンプリングするという、層化2段無作為抽出法を用いた。したがってサンプリングされた地点には商業地、住宅地など様々な地域が含まれた。また性別に関わらず、対象者の年齢層も全ての年齢層を含む事になる⁵。調査への協力率は、平均して50%程度であったが、調査不能の場合は同質の補充サンプルで代替し、各年齢層の対象者の総数をほぼ一定に保つ事を試みた。

この中から SE 尺度に欠損値を持つ者(117名)を除き、最終的に分析の対象となったのは総計1524名であった。男性は663名、女性は861名、その平均年齢は46.30歳であった。TABLE 1 に性および設定した年齢群ごとの対象者数を示す。対象者の職業について、男性では約30%が専門職、管理職で最も多かった。ついで技能・労務職、学生、自営業などが15%~10%程度の割合で続くが、一方で第一次産業に従事する人の割

⁴ 本文中で言及しているように、特定の課題や問題における自己効力感ではなく、他の事象にまでも一般化した自己効力感を指して Generalized Self-Efficacy (一般化(性)自己効力感)と呼ぶ。しかし、Generalized Self-Efficacy に対する定訳はなく、また一般化(性)という語の意味が多義になる恐れがあるので、本論文では特性的自己効力感と命名した。

⁵ なお本研究とは別の目的のために、25-54歳の女性群および65歳以上の年齢群(男女とも)については加重サンプリングを行った。

合は1%程度に留まっていた。女性の場合、約50%が無職の主婦で、パート、事務職、学生などがそれぞれ約10%で続いた。家族構成は、約70%が夫婦のみあるいは核家族で、3世代以上家族は約20%、単身者は7%以下に留まった。学歴について、男性は平均通学年数が13.5年、女性は12.7年と、男女とも高校卒以上の学歴を有している。学歴はやや高学歴であると思われるが、それも含めこれらの指標のいずれも本研究の対象者がわが国の典型的な都市型住民であることを示している。なお対象者の家族構成、職業などを含めた背景変数の詳細に関しては、東・高橋・下仲・中里・佐藤・河合・成田・長田・林・唐沢(1994)に詳しい。

TABLE 1 The Number of Subjects by Age and Sex

Age Groups	13-17	18-24	25-34	35-44	45-54	55-64	65-74	75-	Total
male	43	76	91	105	75	96	107	70	663
female	41	73	111	261	112	91	101	71	861
Total	84	149	202	366	187	187	208	141	1524

調査手続は、原則として専門の調査員による質問紙に基づいた面接法を用いたが、一部留置法も併用した。なおSE尺度を始め本研究で利用した尺度は一連のテストバッテリーの一部として、その他の尺度や質問項目および個人の基本属性である背景変数(社会経済的変数)と同時に測定された。

使用した質問紙(尺度) SE尺度は前述のSherer et al. (1982)の尺度を翻訳して使用した。Sherer et al. (1982)は、社会的スキルや職業的能力の点から36項目をSE尺度の項目として作成している。それらは主として、1)行動を起こす意志、2)行動を完了しようと努力する意志、3)逆境における忍耐、などから構成されている。Sherer et al. (1982)は因子分析の結果に基づき、最終的に23項目をSE尺度を構成する代表項目として選出している。この23項目を日本語に翻訳し、英語を母国語とする者の意見を参考に修正を行った。さらに語句や文意のわかりやすさなどに関して簡単な予備調査を行い、その結果に基づいて語句を若干変更した。最終的には心理学者数名(バイリンガルの者を含む)の協議の上で各項目の訳文を決定した。尺度項目の具体的内容についてはTABLE 3に示す。SE尺度の評定には双極の5件法を用いた。

妥当性を検討するために、20項目からなる抑うつ性尺度CES-D (Center for Epidemiological Studies Depression Scale; Radloff, 1977)、10項目からなる自尊心尺度(Rosen-

berg, 1965)、40項目からなる性役割尺度BSRI (Bem Sex Role Inventory; Bem, 1974; 下仲・中里・本間, 1991)、および1項目評定法による主観的健康感尺度(芳賀・七田・永井・須山・竹野下・松崎・古谷野・柴田, 1984; Maddox, 1962)をそれぞれ用いた。CES-Dについては矢富・Liang・Krause・Akiyama (1993)を、自尊心尺度については星野(1970)をそれぞれ参考に、翻訳を多少改変して使用した。各尺度の評定に関して、CES-Dでは単極の4件法を、自尊心尺度では双極の4件法を、性役割尺度では双極の7件法を、主観的健康感尺度では双極の5件法を、それぞれ用いた。

SE尺度と各尺度との関係は、SE尺度の妥当性の観点から以下のように予測した。まず、SE尺度を一般化した個人の適応を予測する尺度である(Sherer et al., 1982)と見ると、不適応感の尺度である抑うつ性尺度(CES-D)とは負の相関を示すであろう。実際、Sherer & Adams (1983)はMMPIのDスコア(抑うつ傾向を示す得点)を用いて、非抑うつ者ほどSE尺度得点が高いことを示している。抑うつ的な人は効力予期を過小評価する(Leary & Miller, 1986)という知見からも両尺度の負の関係は予測される。

次に、自尊心尺度とは正の相関を得ることが予測される。自尊心が高ければ、たとえ困難な作業であってもそれに取り組み、結果として成功をもたらすことも多い(Bandura, 1977; Leary & Miller, 1986)。その成功経験が個人の自己効力感を形成し、困難に屈することなく頑張らせしめるのである。つまり自尊心の構成要素のひとつとして自己効力感を考えることは可能である。Sherer et al. (1982)や大学生を対象としてSherer et al. (1982)のSE尺度の再検討を行っているWoodruff & Cashman (1993)もSE尺度と自尊心尺度に正の相関を認めており、本研究でも両尺度間では正の関係を示すであろう。

性役割尺度との関係は、Sherer & Adams (1983)によって示されている。彼らはBem(1974)のBSRIを用いてSE尺度得点と男性性得点との間に適度な正の相関($r = .54$)を示す一方、女性性得点との間には弱い負の相関($r = -.19$)を見いだしている。BSRIの男性性尺度は進取の気性に富んだ積極的な特性も測定しており、これは行動を起こしやりとげる意欲という意味での自己効力感の概念に一致すると言う(Sherer & Adams, 1983)。ところが女性性得点との相関の原因についてはSherer & Adams (1983)自身も言及しておらず、理論的裏付けに乏しい。そこで本研究では男性性得点のみを取り上げ、本研究でもSherer & Adams (1983)と同

じ傾向を示すか否かを検討する。

主観的健康感の絶対評価と相対評価の2種類で測定した。前者では自分の健康状態の良否を単純に評価するが(あなたの最近の健康状態は良いですか。それとも悪いですか)、後者では同年輩の人と比較した自分の健康状態の良否を評価する(あなたの健康状態は同年輩の人と比べて、良い方ですか、悪い方ですか)。これら健康状態の主観的な評価結果は、健康管理という1つの目標に対する成功あるいは失敗経験であると考えられることができる。また同時に、高齢者を対象とした研究であるが、主観的健康感の低減と自己効力感の低さの関係を指摘する研究もある(Rodin & McAvay, 1992)。つまり主観的健康感もまた、特性的自己効力感を形成する要因の1つであると考えられるので、主観的健康感の評価が高いほど、SE尺度得点も高いことが予想される。

結 果

記述統計量および得点の分布 得点が高いほど自己効力感の程度が大きくなるよう、Sherer et al. (1982)に従い逆転項目を逆転させて23項目の評定値を加算し、SE尺度得点を算出した。SE尺度得点の記述統計量、Shapiro-WilkのW統計量(正規性の検定)、歪度、尖度について対象者全体と男女別にそれぞれTABLE 2に示す。23項目で構成されるSE尺度の評定は1～5であったので、可能な得点範囲の下限は23点で、上限は115点である。また、対象者全体の得点分布についてはFIGURE 1に示す。

対象者全体の場合、Shapiro-WilkのW統計量では正規性は棄却されたが($W=.983$, $p<.01$, $n=1524$)、尖度、歪度ともに1にも達しておらず、ほぼ正規に近い分布を示した。また男女別に得点分布に関して同様の分析を行ったところ、男女ともに正規性は棄却されなかった(男性: $W=.983$, $p<.21$, $n=663$; 女性: $W=.984$, $p<.15$, $n=861$)。尖度、歪度ともに1に達しておらず、傾向としては対象者全体の場合と同様に正規分布の形状を示した。

TABLE 2 Descriptive Statistics for Generalized Self-Efficacy Scale

	Mean	SD	Min	Max	W	Skewness	Kurtosis
Total	76.45	13.70	27	115	.983	-.061	.305
Gender							
male	77.93	13.93	27	115	.983	-.049	.239
female	75.31	13.42	27	113	.984	-.093	.361

Note. W : Shapiro and Wilk's W-statistic

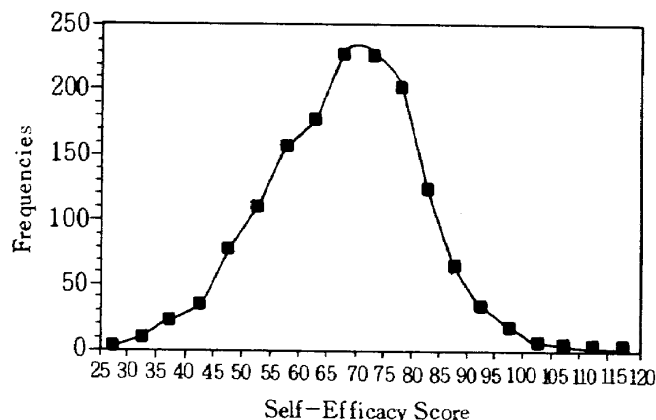


FIGURE 1 Distribution of Generalized Self-Efficacy Score

因子構造の検討 SE尺度の因子構造を検討するために、共通性の推定にはSMCを用いた主因子法による因子分析を行った。まず男女別に因子数を1～3まで探索的に変化させたところ、男女を問わず第1因子の固有値が第2因子以下に比べて非常に高かった。第1因子から順に固有値の変化を示すと、男性では、5.97, 1.37, 0.99となり、女性では、5.46, 1.44, 1.00となった。各因子解(varimax法)における因子の内容も検討したが、因子の内容および固有値の変化の観点から、因子軸の回転は行わない1因子解を採用した。各項目の因子負荷量は、男女でほぼ同じパターンを示した。男女それぞれの因子負荷行列間の類似性を数量的に示すために、因子負荷行列間の相関を求めた(柳井・繁樹・前川・市川, 1990)。その結果、 $r=.99$ の非常に高い相関を得ることができ、因子構造は男女で一致した。次にTABLE 1に示した計8つの年齢群で、各年齢群別に上記と同じ方法で因子分析を行った。各年齢群別でも、性別の場合と同様にその固有値の変化および各因子解における因子の解釈を試みたが、いずれの年齢群でも固有値は第2因子以下に比較して、第1因子が非常に高く、2因子解以上では因子の解釈が難しかった。そこですべての年齢群で1因子解を採用した。男女別の分析と同様に、各年齢群間の因子負荷行列の類似性を検討するために、各年齢群の因子負荷行列間の相関を求めたところ、平均で $r=.98$ (範囲: $r=.96\sim.99$)のそれぞれ非常に高い相関を得た。したがって年齢群別でも、因子構造はやはり一致した。

最後に全対象者について、これまで同様の方法で因子分析を行った。その結果、第1因子の固有値の高さ(第1因子より順に5.67, 1.37, 0.97)、および各因子解の因子の内容の点から1因子解を採用した(TABLE 3参照)。ほ

ばすべての項目が.3以上の負荷量を持ち、個々の項目がSE尺度に有効に寄与している。以上のようにSE尺度の因子構造は、性や年齢によらず安定した1因子構造であることが示された。

TABLE 3 The Results of Factor analysis and Item analysis for Generalized Self-Efficacy scale

Item	Factor Loading	Item-Total Correlation
1) 自分が立てた計画は、うまくできる自信がある	-0.45	.43
* 2) しなければならないことがあっても、なかなか取りかからない	0.48	.43
3) 初めはうまくいかない仕事でも、できるまでやり続ける	-0.43	.42
* 4) 新しい友達を作るのが苦手だ	0.50	.47
* 5) 重要な目標を決めても、めったに成功しない	0.60	.55
* 6) 何かを終える前にあきらめてしまう	0.64	.58
7) 会いたい人を見かけたら、向こうから来るのを待たないでその人の所へ行	-0.29	.29
く		
* 8) 困難に出会うのを避ける	0.52	.48
* 9) 非常にややこしく見えることには、手を出そうとは思わない	0.57	.53
* 10) 友達になりたい人でも、友達になるのが大変ならばすぐに止めてしまう	0.52	.48
11) 面白くないことをする時でも、それが終わるまでがんばる	-0.38	.40
12) 何かをしようと思ったら、すぐにとりかかる	-0.41	.42
* 13) 新しいことを始めようと決めても、出だしてつまづくとうすにきらめて	0.61	.57
しまう		
14) 最初は友達になる気がしない人でも、すぐにあきらめないで友達になろう	-0.29	.31
とする		
* 15) 思いがけない問題が起こった時、それをうまく処理できない	0.56	.54
* 16) 難しそうなのは、新たに学ぼうとは思わない	0.53	.50
17) 失敗すると、一生懸命やろうと思う	-0.37	.38
* 18) 人の集まりの中では、うまく振る舞えない	0.55	.53
* 19) 何かしようとする時、自分にそれができるかどうか不安になる	0.49	.44
20) 人に頼らない方だ	-0.27	.27
21) 私は自分から友達を作るのがうまい	-0.40	.41
* 22) すぐにあきらめてしまう	0.65	.61
* 23) 人生で起きる問題の多くは処理できるとは思えない	0.53	.51
Eigenvalue	5.68	

Note. * Reversed items

信頼性の検討 SE尺度23項目全体の構造は因子分析より一次元的であることが明らかとなったので、全項目を対象として信頼性の検討を行う。まずCronbachの α 係数により、内的一貫性について検討した。 α 係数を男女別、各年齢群別、それらを込みにした対象者全体のそれぞれについて算出し、TABLE 4の左端欄に示す。性、年齢群に関わらず、いずれの場合においてもSE尺度の α 係数は0.8以上の値を示している。特に対象者全体の場合では0.88と非常に高い値であっ

た。内的一貫性については、項目一得点相関(item-total correlation)にも現れている。対象者全体での項目一得点相関では、23項目全てで有意な中程度(範囲: $r = .27 \sim .61$, 平均 $r = .46$)の相関を示した(TABLE 3参照)。男女別、あるいは各年齢群別に項目一得点相関を求めた場合も、多少のばらつきはあるが、ほぼ同様の結果を得た。さらに別サンプルの67名を対象に2週間の期間をおいて再検査を実施したところ、その再検査信頼性は.73を示した。

TABLE 4 Chronbach's α and Correlations of Scores on Generalized Self-Efficacy Scale with Other Measures

	α	Correlations				
		Personality Measures			Perceived Health	
		CES-D	R-SE	BSRI-M	Absolute	Relative
Total	.88	-.30***	.56***	.43***	.18***	.21***
Gender						
male	.88	-.37***	.59***	.41***	.21***	.23***
female	.87	-.25***	.52***	.43***	.16***	.21***
Age Groups						
13-17	.88	-.26*	.44***	.31**	.11	.35***
18-24	.86	-.31***	.54***	.25**	.15+	.12
25-34	.88	-.37***	.51***	.48***	.22**	.29***
35-44	.89	-.25***	.55***	.49***	.23***	.22***
45-54	.88	-.26***	.55***	.47***	.19**	.29***
55-64	.88	-.28***	.63***	.40***	.14*	.23**
65-74	.87	-.30***	.59***	.42***	.17*	.17*
75+	.88	-.35***	.56***	.37***	.19*	.17*

Note. *** $p < .001$ ** $p < .01$ * $p < .05$ + $p < .10$

CES-D : Center for Epidemiological Studies Depression Scale

R-SE : Rosenberg's Self Esteem Scale

BSRI-M : Bem Sex Role Inventory - Masculinity Scale

Absolute : Perceived Health - Absolute Evaluation

Relative : Perceived Health - Relative Evaluation

他のパーソナリティ尺度、主観的健康感との関係—構成概念妥当性の検討 構成概念妥当性は、SE尺度と、3つのパーソナリティ尺度(抑うつ性尺度CES-D、自尊心尺度、性役割尺度)および健康に関する主観的評価、それぞれとの相関関係により検討した。いずれの尺度も測定する構成概念の傾向が大きくなるほど、得点が高くなるように得点化した。TABLE 4にSE尺度と各測度との相関を、全体、男女別および各年齢群別にそ

れぞれ示す。

抑うつ性尺度のCES-Dとは全体で $r = -.30$ と負の相関を示し、男女別、各年齢群別でも、ほぼ同様に $r = -.25 \sim r = -.37$ の中程度の負の相関を示した。自尊心尺度との相関は全体で $r = .56$ と相対的に高い相関値を示した。男女別、年齢群別でも全体と同様に $r = .44 \sim r = .63$ と比較的高い相関値を示している。性役割尺度の男性性尺度得点とは、全体で $r = .43$ 、性別でも同様に中程度の相関を示した。各年齢群別では、18—24歳群で相対的に低い相関値($r = .25$)を示しているが、その他の年齢群では全体とほぼ同様に $r = .31 \sim r = .49$ の中程度の相関を示した。

健康に関する主観的評価については、相対評価、絶対評価のいずれもSE尺度と $r = .2$ 程度の弱い相関がみられた。男女別でも数値の大小はあったが、対象者全体の場合とほぼ同じ傾向を示した。各年齢群別でも、基本的には全体と同様の相関パターンで、SE尺度と主観的健康感の間には弱い相関が見られた。

考 察

本研究で使用したSE尺度の得点分布に関して、対象者全体の場合、正規性は棄却されたが、分布の形状はほぼ正規形を示し、歪度、尖度とも十分に小さかった。男女別では正規性は棄却されず、歪度、尖度とも十分に小さかった。したがってSE尺度の得点分布は、ほぼ正規分布であると言える。すなわち今後、SE尺度を使用する場合の分析において、正規性の仮定を持つ多くのパラメトリックな解析法の使用が可能となり、尺度としては十分に望ましいものである。

因子分析の結果からは、SE尺度が構造的には安定した1次元的な尺度で、また全ての項目が一定以上の因子負荷量を持つことから因子的妥当性も非常に高い尺度であることが示された。この傾向は、男女、年齢群を問わずに一貫していた。ところがSherer et al. (1982)はSE尺度を因子分析し、一般性因子と社会性因子の2因子から構成されると述べている。上述したように、本研究では積極的に2因子解を選択する理由が見いだせず1因子解を採用したため、SE尺度の構造はSherer et al. (1982)と異なったものとなった。

こうした本研究とSherer et al. (1982)の研究間での因子構造の違いが何に起因するのかは、さらに検討を要する問題である。1つの可能性としては、使用した因子分析法に問題があると考えられる。尺度の構造を確認するために因子分析を用いた従来の諸研究においては、因子分析の手法そのものにも限界があったこと

が指摘されている(古谷野・柴田・芳賀・須山, 1989)。いわゆる“探索的(説明的)因子分析(exploratory factor analysis)”では、たとえ表面的には異なる因子構造が得られても、真の構造はほとんど変わらない可能性もある。理論や経験から導かれたモデルと得られたデータとの一致度を実際のデータにより検証するためには、確認的(仮説検証的)因子分析(confirmatory factor analysis)を用いねばならない。確認的因子分析は、何らかの前提条件や事前情報を積極的に利用して仮説を作成し、その仮説を確認するための因子分析である。すなわちSherer et al. (1982)の因子構造を仮定して、確認的因子分析によりデータと一致するか否かを検討すればよい。

ところが一方、Sherer et al. (1982)のSE尺度に因子分析を行った研究は筆者らの知る限り非常に少ない。この点は確認的因子分析を実施する上でも大きな問題となる。Sherer et al. (1982)以外には、既述したWoodruff & Cashman (1993)の研究があるが、そこではSherer et al. (1982)と同様の2因子解と、2因子がより下位の因子より構成された5因子解、の2つの分析結果を示していた。これらの他には因子分析的研究が無く、SE尺度の因子構造についての再現性は不十分である。しかもSherer et al. (1982)は探索的因子分析の結果、事後的に因子名を命名しており、必ずしも2因子構造について理論的根拠があるわけではない。そのため、Sherer et al. (1982)の因子構造をモデルとした確認的因子分析をわが国のサンプルだけを対象に行う事は、可能であっても、その積極的な意味を見いだす事が難しい。さらにSherer et al. (1982)の示す2因子の内、一般性の因子は社会性の因子に比べて、より有用であると言われており、社会性の特性的自己効力の積極的存在意味に関しては疑問視されている(Sherer & Adams, 1983)。したがって、SE尺度の実用性の面から考えると、本研究で得られた一般性因子だけの1因子構造は非常に明解で、使用し易い尺度であるとも言える。

もう1つの解釈の可能性として、本研究とSherer et al. (1982)やWoodruff & Cashman (1993)の研究では調査の対象者が異なっているため、因子構造の差は個々の研究における対象者の個人差を反映していると言えるかもしれない。Sherer et al. (1982)あるいはWoodruff & Cashman (1993)の対象者が十分に米国国民を代表しているのであれば、本研究と彼らの研究での因子構造の差異は文化あるいは人種差であるという可能性も考えられる。いずれにせよ、SE尺度の構造の

差異については、本研究の範囲では答えることができない。そのため、今後は確認的因子分析に代表される因子構造を決定できる分析法を日米の両サンプルに対して同時に用いるといった、より深い研究の積み重ねが必要である。

23項目全体での内的一貫性の観点からの信頼性については、TABLE 4 に示したように、対象者全体、男女別、年齢群別のいずれにおいてもほぼ満足のいく高い値を示した。なお本研究で得られた α 係数の値は、Sherer et al. (1982) や Woodruff & Cashman (1993) と同等あるいはそれ以上の値である。再検査信頼性はやや低かったが、実用上問題となるほど低い値ではない。以上を総合して、わが国のコミュニティサンプルを対象としても、SE 尺度は性や年齢群を問わず、内的整合性の高い、信頼性を十分に持つ尺度であると言える。

次に構成概念妥当性について考察する。抑うつとの関係では、男女、年齢群を問わず予測と一致した負の相関を示し、Sherer & Adams (1983) とほぼ同様の傾向である。同じ Sherer et al. (1982) の SE 尺度を、カナダの中学生、高校生に施行した Ehrenberg, Cox & Koopman (1991) の研究や、Tipton & Worthington (1984) の SE 尺度を米国の大学生に適用し、絶望感尺度 (Hopelessness Scale ; Beck, Weissman, Lester & Trexler, 1974) との関係を見た Wang & Richarde (1988) の研究でも、相関値の大小はあるが、同様に負の相関を見いだしている。自尊心尺度や性役割尺度の男性性尺度との相関についても、男女、年齢群で相関値に多少の違いはあったが、全て予測と同じ方向の結果を得た。しかも Sherer et al. (1982), Sherer & Adams (1983) あるいは Woodruff & Cashman (1993) の結果とも同様であった。このようにパーソナリティ尺度と SE 尺度との関連からは、SE 尺度の構成概念妥当性は支持されるであろう。

主観的健康感と SE 尺度との相関では、絶対評価と相対評価のいずれも弱い相関しか認められなかったが、予測と一致する方向であった。男女別、年齢群別でも数値の大小はあったが、対象者全体の場合とほぼ同じ傾向を示した。例えば、Ferrari & Parker (1992) は米国の大学 1 年生を対象とした研究で、Sherer et al. (1982) の SE 尺度と学業成績の間に相関を見いだしていない。その結果 Ferrari & Parker (1992) は、特定の状況、目的のためには当該の状況、目的に応じた SE 尺度を用いるべきであると主張している。つまり特性的自己効力感を測定する SE 尺度では、特定の行動や

特定の評価変数との相関、本研究の場合では主観的健康感と SE 尺度との相関は、予測と同じ方向性をもった相関であっても、その絶対値は相対的に小さくなると考えられる。また主観的健康感尺度は 1 項目評定法であったので、尺度としての信頼性は低くなる。主観的健康感尺度の信頼性の低さが相関値を低める方向に影響している可能性も考えられるかもしれない。いずれにせよ、ここに示した以上の各変数との関係より、SE 尺度は全体として、性・年齢群に関わり無く妥当性を持つ尺度であると思われる。

本研究で検討を行った SE 尺度はわが国のコミュニティサンプルを対象としても、パラメトリックな検定に耐え得る尺度である上に、男女・年齢群によらず、十分な信頼性・妥当性を有する尺度であることが確認された。性や年齢を考慮せずに特性的自己効力感を測定できる SE 尺度は本尺度をおいて他になく、その有用性は大きい。SE 尺度は“重要な研究の道具”であり (Sherer & Adams, 1983)、今後様々な場面で使用することが考えられる。ただし、本研究における妥当性は種々の測度との相関によって検討されているだけである。したがって、社会的認知理論に基づいた基準関連妥当性の検討、あるいは特性的自己効力感に類似した構成概念との関係を調べることによる弁別的妥当性の検討などを行う事が今後の課題の 1 つとなる。またもちろん Woodruff & Cashman (1993) の言う尺度の適用範囲にも注意して SE 尺度を使用する必要がある。例えば、Sherer & Adams (1983) や桜井・桜井 (1991) が指摘する臨床的場面あるいは学校などの実際の場面において SE 尺度を用いる場合には、実際に使用する前に、本研究で用いた変数とは異なった指標により基準関連妥当性の検討を詳細に行う必要があるかもしれない。

引用文献

- 東 洋・高橋恵子・下仲順子・中里克治・佐藤眞一・河合千恵子・成田健一・長田由紀子・林 洋一・唐沢真弓 1994 生涯発達に伴うソーシャル・サポート・ネットワークの変容とその社会適応における役割の日米比較 平成 2, 3 年度文部省科学研究費補助金総合研究(A) 研究成果報告書
- Bandura, A. 1977 Self-efficacy : Toward a unifying theory of behavioral change. *Psychological Review*, 84, 191—215.
- Beck, A.T., Weissman, A., Lester, D., & Trexler, L. 1974 The measurement of pessimism : The

- hopelessness scale. *Journal of Consulting and Clinical Psychology*, **42**, 861—865.
- Bem, S.L. 1974 The measurement of psychological androgyny. *Journal of Consulting and Clinical Psychology*, **42**, 155—162.
- Chambless, C.A., & Murray, E.J. 1979 Cognitive procedures for smoking reduction : Symptom attribution versus efficacy attribution. *Cognitive Therapy and Research*, **3**, 91—95.
- Ehrenberg, M.F., Cox, D.N., & Koopman, R.F. 1991 The relationship between self-efficacy and depression in adolescents. *Adolescence*, **26**, 361—374.
- Ferrari, J.R., & Parker, J.T. 1992 High school achievement, self-efficacy, and locus of control as predictors of freshman academic performance. *Psychological Reports*, **71**, 515—518.
- 福島脩美 1993 社会的認知理論によるカウンセリングと心理療法 東京学芸大学紀要 第一部門 教育科学, **44**, 263—272.
- 芳賀 博・七田恵子・永井晴美・須山靖男・竹野下訓子・松崎俊久・古谷野 亘・柴田 博 1984 健康度自己評価と社会・心理・身体的要因 社会老年学, **20**, 15—23.
- 星野 命 1970 感情の心理と教育(二) 児童心理, **24**, 1445—1477.
- Kendrick, M.J., Craig, K.D., Lawson, D.M., & Davidson, P.O. 1982 Cognitive and behavioral therapy for musical-performance anxiety. *Journal of Consulting and Clinical Psychology*, **50**, 353—362.
- 古谷野 亘・柴田 博・芳賀 博・須山靖男 1989 PGC モラールスケールの構造—最近の改訂作業がもたらしたもの— 社会老年学, **29**, 64—74.
- Leary, M.R., & Miller, R.S. 1986 Social psychology and dysfunctional behaviour : Origins, diagnosis and treatment. New York : Springer-Verlag. (安藤清志・渡辺浪二・大坊郁夫 訳 1989 不適応と臨床の社会心理学 誠信書房)
- Maddox, G.L. 1962 Some correlates of differences in self-assessment of health status among the elderly. *Journal of Gerontology*, **17**, 180—185.
- 前田基成・坂野雄二・東條光彦 1987 系統的脱感作法による視線恐怖反応の消去に及ぼす SELF-EFFICACY の役割 行動療法研究, **12**, 68—80.
- 中澤 潤・大野木裕明・伊藤秀子・坂野雄二・鎌原雅彦 1988 社会的学習理論から社会的認知理論へ—Bandura 理論の新展開をめぐる最近の動向—心理学評論, **31**, 229—251.
- Radloff, L.S. 1977 The CES-D scale : A self-report depression scale for research in the general population. *Applied Psychological Measurement*, **1**, 385—401.
- Rodin, J., & McAvay, G. 1992 Determinants of change in perceived health in a longitudinal study of older adults. *Journal of Gerontology*, **47**, 373—384.
- Rosenberg, M. 1965 Society and the adolescent self-image. Princeton : Princeton University Press.
- 坂野雄二 1989 一般性セルフ・エフィカシー尺度の妥当性の検討 早稲田大学人間科学研究, **2**, 91—98.
- 坂野雄二・東條光彦 1986 一般性セルフ・エフィカシー尺度作成の試み 行動療法研究, **12**, 73—82.
- 坂野雄二・東條光彦 1993 セルフ・エフィカシー尺度 上里一郎 (監修) 心理アセスメントハンドブック 西村書店 Pp.478—489.
- 桜井茂男 1987 自己効力感が学業成績に及ぼす影響 教育心理, **35**, 140—145.
- 桜井茂男・桜井登世子 1991 児童用領域別効力感尺度作成の試み 教育研究所紀要 (奈良教育大学教育研究所), **27**, 131—138.
- Shelton, S.H. 1990 Developing the construct of general self-efficacy. *Psychological Reports*, **66**, 987—994.
- Sherer, M., & Adams, C.H. 1983 Construct validation of the self-efficacy scale. *Psychological Reports*, **53**, 899—902.
- Sherer, M., Maddux, J.E., Mercandante, B., Prentice-Dunn, S., Jacobs, B., & Rogers, R.W. 1982 The self-efficacy scale : Construction and validation. *Psychological Reports*, **51**, 663—671.
- 下仲順子・中里克治・本間 昭 1991 長寿にかかわる人格特徴とその適応との関係—東京都在住100歳老人を中心として— 発達心理学研究, **1**, 136

—147.

竹網誠一郎・鎌原雅彦・沢崎俊之 1988 自己効力に関する研究の動向と問題 教育心理学研究, 36, 172—184.

Tipton, R.M., & Worthington, E.L., Jr. 1984 The measurement of generalized self-efficacy : A study of construct validity. *Journal of Personality Assessment*, 48, 545—548.

Wang, A.Y., & Richarde, R.S. 1988 Global versus task-specific measures of self-efficacy. *Psychological Record*, 38, 533—541.

Woodruff, S.L., & Cashman, J.F. 1993 Task, domain, and general efficacy : A reexamination of the Self-efficacy Scale. *Psychological Reports*, 72, 423—432.

柳井晴夫・繁樹算男・前川眞一・市川雅教 1990 因

子分析—その理論と方法— 朝倉書店

矢富直美・Liang, J., Krause, N., & Akiyama, H. 1993 CES-D による日本老人のうつ症状の測定—その因子構造における文化差の検討— 社会老年学, 37, 37—47.

付 記

本研究は文部省科学研究費総合研究(A)「生涯発達に伴うソーシャルサポートネットワークの変容とその社会的適応における役割(研究代表：東 洋, 課題番号02301016)」および日本学術振興会(日米教育文化協力事業, 代表：東 洋)の助成を受けた。なお、本研究の一部は日本心理学会第55回大会および第56回大会において発表された。

(1995.3.7 受稿, 6.20 受理)